

Title	京阪エレクトロニクス企業の競争優位の源泉と移転可能性
Sub Title	
Author	小田智文(Oda, Tomofumi) 浅川和宏
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2001
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2001年度経営学 第1673号 不可
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002001-1673">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002001-1673</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 論文要旨

所属ゼミ	浅川研究会	学籍番号	80028241	氏名	小田 智文
<p>(論文題名)</p> <p>京阪エレクトロニクス企業の競争優位の源泉と移転可能性</p>					
<p>(内容の要旨)</p> <p>1980年代に日本のエレクトロニクス企業の躍進が幻であるかのように、バブル崩壊から端を発するこの10年間、ほとんどの日本エレクトロニクス企業は業績停滞、悪化に苦しんでいる。しかしながらその悪環境の中、業績を躍進させ海外からも高い評価を得ている一握りのエレクトロニクス企業群がある。それらの企業は京都と大阪を貫く淀川沿いに位置するいわゆる京阪バレーと呼ばれる地域に集まっている。</p> <p>それらの企業の競争優位性は何に起因しているのであろうか。京阪バレーという地域の中でシリコンバレーのような競争と協調のクラスターによって実現しているのであろうか。それとも個別企業の強力なコンピテンスなど全く別の要因からであらうか。それともその2つの要因が相互に影響しあうことから実現しているのであろうか。</p> <p>本論文ではこれらの研究設問を文献研究、公表データ統計分析、アンケート及びインタビューによるフィールドワークの3角度からの調査 (Triangulation method) を通じて調査し、京阪バレーの競争優位の源泉を明らかにすることを試みた。そこから分かったことはまず一つ目に京阪バレー企業と言っても優良企業から標準企業まで全く業績や業務内容がばらばらの企業群であったということである。二つ目にそれらの企業群は経営の手法や戦略、資源は様々に分散しているが、経営の根幹となる部分、すなわち創業家のリーダーシップと京阪地域特有の企業文化が社員の根底に根付いており、それが競争優位の源泉として京阪バレー企業群を形成していたことが分かった。またその競争優位を持続的競争優位とするために本社や R&amp;D 部門を京阪地区に維持する。</p> <p>さらに日本企業の競争優位を回復することを目的として京阪クラスターモデルの他産業、他地域への移転可能性を探ってみた。それは時とともに創業家引退によるリーダーシップの希薄化、もしくはプラザ合意以降のグローバル化とともに従業員に根付く企業文化が希薄化してしまったことから、世界を代表するエレクトロニクス・クラスターであるこの日本を最大限活用できていないことに原因があるのではと私は考える。よって経営者が創業家精神と企業文化をどのように再構築し、組織のパワーを最大限だしきるかに日本企業の競争優位の復活がかかっているであろう。</p>					